

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゅ うせ え いしゅよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を
 救 世 主 人 墓

ふ うじ て 、 へ い そ つ なんぢ の い さ ぎ よ き み を
 封 兵 卒 爾 潔 軀

ま も る と き 、 なんぢ は み っ か め に ふ く か つ
 守 時 爾 三 日 目 復 活

し て 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。
 世 界 生 命 賜

ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢ い の ち を ほ ど こ す の
 故 天 軍 爾 生 命 施

しゅ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は
 主 呼 光 榮

なんぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾

の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む
 國 歸 獨 人 慈

しゅ よ 、 こ う え い は なんぢ の お も ん ぱ か り に
 主 光 榮 爾 慮

き す 。
 歸

【 克肖女マリヤのトロパリ 第8調 】

は は よ、 なんぢの うちにかみの ぞうによるもの
 母 爾 内 神 像 由 者

は た し か に す く わ れ た り 。 け だ し なんぢは
 確 救 蓋 爾

じゅう じ か を と り て ハリス トス に し た が い、 す ぎ
 十 字 架 執 従 過

や す き か ら だ を か ろ ん じ、 ふ し の も の た る
 易 體 輕 不 死 者

た ま し い の た め に お も ん ぱ か る こ と を お こ な い
 靈 爲 慮 行

を も っ て お し え た り 。 ゆ え に こ く し ょ う な る
 以 教 故 克 肖

マ リ ヤ よ、 なんぢの しん は し ょ て ん し と と も に よ
 爾 神 諸 天 使 偕 喜

ろ こ び た も お う。
 給

【 克肖女マリヤのコンダク 第3調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き い
 光 榮 父 子 と 聖 神 に き 歸

い す、

さき に いんこう に ふけり た る も の は い ま は つ 痛
 先 淫行 耽 者 今 痛
 う か い に よ り て ハリス ス の よ め と あ ら わ あ れ 、
 悔 由 聘 女 現
 てん の ど せ い に な ら い て 、 じゅ う じ か の ぶ き 器
 天 度 生 效 十 字 架 武 器
 を も っ て あ っ き を ほ ろ ぼ お す 。 ゆ え に
 以 惡 鬼 滅 故
 し え い な る マ リ ヤ よ 、 な ん ぢ は てん の く に の
 至 榮 爾 天 國
 よ め と あ ら わ れ た あ り 。
 聘 女 現

【 復活のコンダク 第1調 】

しゅ さ い よ 、 な ん ぢ は か み な る に よ り て こ う
 主 宰 爾 神 因 光
 え い の う ち に は か よ り ふ く か つ し 、 せ 世
 榮 中 墓 復 活
 か い を も と も に ふ く か つ せ し め た ま え り 。
 界 借 復 活 給
 ひ と の せ 性 い は な ん ぢ を か み と し て ほ め う 歌
 人 性 爾 神 讚 歌

た い 、 し は ほ ろ ぼ さ れ 、 ア ダ ム は た の し
 死 滅 樂

み 、 エ ヴ ア は い ま な わ め よ り と か れ て
 今 縛 釋

よ ろ こ び て よ ぶ 、 ハ リ ス ト ス よ 、 な ん ぢ は
 觀 呼 爾

し ゅ う じ ん に ふ く か つ を た も う し ゅ な り 。
 衆 人 復 活 賜 主

【 聖三の歌 】

代禱) ^{しゅ}主よ、^{けいけん}敬虔なる^{もの}者を^{すく}救い、^{およ}及び^{われら}我等に^き聆き^{たま}給え、

しゅ よ 、 け い け ん な る も の を す く い 、 お よ び わ れ
 主 敬 虔 者 救 及 我

ら に き き た ま え 。
 等 聆 給

代禱) ^{よよ}世世に、

ア ミ ン。

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ゅ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 神にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

【 提綱（プロキメン）主日第1調 及び克肖女の第4調 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ}主よ、^{われらなんぢ}我等爾を^{たの}頼むが^{ごと}如く、^{なんぢ}爾の^{あわれみ}憐を^{われら}我等に^た垂れ^{たま}給え、

しゅ よ 、 わ れ ら なんぢ を た の む が ご と く 、
主 我 等 爾 頼 如
な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
爾 憐 我 等 垂 給
え 。

誦經) ^{ぎじん}義人よ、^{しゅ}主の^{ため}爲に^{よろこ}喜べ、^{さんえい}讚榮するは^{ぎしゃ}義者に^{かな}適う、

しゅ よ 、 わ れ ら なんぢ を た の む が ご と く 、
主 我 等 爾 頼 如
な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
爾 憐 我 等 垂 給
え 。

誦經) ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾は^{なんぢ}爾の^{せいしよ}聖所に^{おい}於て^{おごそか}嚴なり、

か み よ 、 なんぢ は なんぢ の せいしよ に お い
神 爾 爾 聖 所 於
て お ご そ か な り 。

【 使徒經 (アポストロス) 321 半端 エウレイ書9章11節~14節 】

代禱) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒^{じん}パウエルが^{たつ}エウレイ人に^{しよ}達する^{よみ}書の讀、

代禱) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、ハリストス、將來の福の司祭長は來りて、更に大に、更に全備なる幕、
てつくところあらすなわちそのぞうしきあらざものよおやぎわかきおうしちもつ
手の造る所に非ず、即其造式に非る者に縁りて、牡山羊と牡犢との血を以て
するに非ず、乃己の血を以て、一次聖所に入りて、永遠の贖を獲たり。蓋若
し牡牛と牡山羊との血、及び牝犢の灰は、穢れたる者に灑がれて、之を聖にし、肉體
の潔淨を致さば、況や聖神に由りて、瑕なくして、己を神に獻げしハリストスの血は、
我等の良心を死の行より潔めて、活ける眞の神に奉事せしむるをや。

(比較用 口語訳) キリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわぎを取り除き、生ける神に仕える者としなないであろうか。

【 使徒經 (アポストロス) 208 端 ガラティヤ書 3 章 23 節～29 節 】

代禱) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

代禱) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、信の來らざる先には、我等律法の下に護られ、閉されて、信の顯るるを俟
てり。斯く律法は我等をハリストスに導く師傅たりき、我等信に由りて義とせられん爲な
り。信の來りし後、我等は已に師傅の下に在らず。蓋爾等皆ハリストス イイスを信
ずるに由りて神の子なり。爾等皆ハリストスに於て洗を受けし者はハリストスを衣たり。既
にイウデヤ人もエルリン人もなく、奴隷も自主もなく、男性も女性もなし、蓋爾等皆
ハリストス イイスに在りて一なり。若し爾等ハリストスに屬せば、則アヴラアムの裔
たり、且許約に由りて嗣子たるなり。

(比較用 口語訳) 兄弟よ、信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視されており、やがて啓示される信仰の時まで閉じ込められていた。このようにして律法は、信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである。しかし、いったん信仰が現れた以上、わたしたちは、もはや養育掛のもとにはいない。あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。

【 アリルイヤ 主日第1調 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{ねが}願わくは^わ我が^{ため}爲に^{あだ}仇を^{かえ}復し、^{われ}我に^{しょみん}諸民を^{したが}従^{かみ}わしむる^{さんしょう}神は讚頌せられん、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{おおい}大なる^{すくい}救を^{おう}王に^{ほどこ}施し、^{あわれみ}憐を^{なんぢ}爾の^{あぶら}膏^{もの}つけられし^{およ}者^{そのすえ}ダヴィド^{よよ}及び^{よよ}其^{よよ}裔に^{よよ}世に

^た垂るる^{もの}者よ、^{われなんぢ}我^な爾^{うた}の名に歌わん、

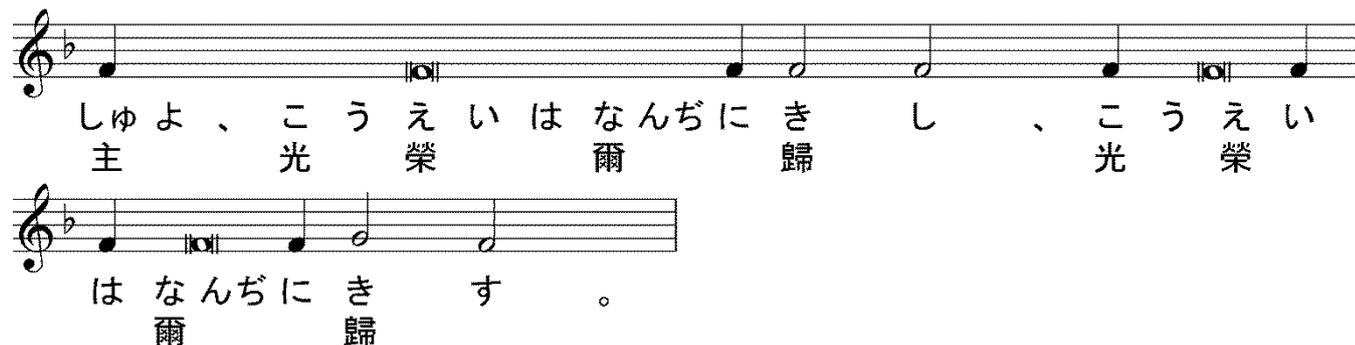
アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書 47 端 10 章 32~45 節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{でん} ^{せいふくいんけい} ^{よみ} マルコ傳の聖福音經の讀、



誦經) ^{つつし} ^き ^か ^{とき} ^{じゅうにとめ} ^{おのれ} ^{およ} ^{こと} ^つ ^い 謹みて聴くべし、彼の時イイス、十二徒を召して、己に及ぼんとする事を語げて曰

^み ^{われら} ^{のぼ} ^{ひと} ^こ ^{しさいしよちょうおよ} ^{がくしら} ^{わた} ^{かれら} へり、視よ、我等イエエルサリムに上る、人の子は司祭諸長及び學士等に付されん、彼等

^{これ} ^し ^{さだ} ^{これ} ^{いほうじん} ^{わた} ^{これ} ^{はづかし} ^{これ} ^{むちう} ^{これ} ^{つばき} ^{これ} ^{ころ} 之を死に定め、之を異邦人に付し、之を辱め、之を鞭ち、之を唾し、之を殺さ

^{しこう} ^{かれだいさんじつ} ^{ふくかつ} ^{とき} ^こ ^{およ} ^{かれ} ^つ ん、而して彼第三日に復活せん。時にゼウエデイの子イアコフ及びイオアン彼に就きて

^{いわ} ^し ^{われら} ^{もと} ^{ところ} ^{ねが} ^{なんぢわれら} ^{ため} ^{これ} ^{おこな} ^{かれ} ^{これ} ^い 曰く、師よ、我等の求むる所、願わくは爾我等の爲に之を行え。彼は之に謂へり、

^わ ^{なんぢら} ^{ため} ^{なに} ^{おこな} ^{ほつ} ^{かれい} ^{われらなんぢ} ^{こうえい} ^{うち} ^{おい} 我が爾等の爲に何を行わんことを欲するか。彼曰へり、我等爾が光榮の中に於て、

^{ひとり} ^{なんぢ} ^{みぎ} ^{ひとり} ^{なんぢ} ^{ひだり} ^ざ ^{たま} ^{かれら} ^い ^{なんぢら} 一人は爾の右に、一人は爾の左に坐せんことを賜え。イイス彼等に謂へり、爾等の

^{もと} ^{ところ} ^し ^{なんぢらわ} ^の ^{さかづき} ^の ^{よく} ^わ ^う ^{せん} ^う 求むる所を知らず。爾等我が飲む爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くるこ

^{よく} ^{かれらい} ^{よく} ^{かれら} ^い ^{なんぢら} ^わ ^の ^{さかづき} ^の ^わ とを能するか。彼等曰へり、能す。イイス彼等に謂へり、爾等は我が飲む爵を飲み、我

^う ^{せん} ^う ^{しか} ^わ ^{みぎおよ} ^わ ^{ひだり} ^ざ ^わ ^{あた} ^{あら} が受くる洗を受けん。然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與うべきに非ず、

^{すなわちそな} ^{もの} ^{あた} ^{じゅうもんとこれ} ^き ^{およ} ^い ^{きどお} 乃備えられたる者に與えられん。十門徒之を聞きて、イアコフ及びイオアンを焔れ

^{かれら} ^め ^{いわ} ^{しよみん} ^{しよ} ^{おうこう} ^な ^{もの} ^{その} ^{たみ} ^{つかさど} ^{たいじんら} り。イイス彼等を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等

^{その} ^う ^え ^{けん} ^と ^{なんぢら} ^し ^{ところ} ^{ただなんぢら} ^{うち} ^か ^べ ^{すなわちなんぢ} 其上に權を執るは、爾等の知る所なり、唯爾等の中には斯くある可からず、乃爾

ら うち おおい ほつ もの なんぢら えきしゃ な ベ なんぢら うち かしら
等の中に 大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し、爾等の中に 首たらんと

ほつ もの しゅうじん ぼく な けだしひと こ きた ひと つか ため あら
欲する者は、衆人の僕と爲るべし。蓋 人の子の来りしも、人を役わん爲に非ず、

すなわちひと つか かつおのれ いのち あた おお もの あがない な ため
乃 人に役われ、且 己の生命を與えて、衆くの者の 贖を爲さん爲なり。

(比較用 口語訳) イエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。さて、ゼバダイの子のヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちが頼みすることは、なんでもかなえてくださるようお願いします」。イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」。十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおりに、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 33 端 7 章 36~50 節 】

か とき ら いちにん とも しよく こ かれ
誦經)彼の時 ファリセイ等の一人 イイススに共に 食せんことを請いたれば、彼はファリセイの

いえ い せきざ とき そのまち おんな つみ もの かれ いえ せきざ
家に入りて 席坐せり。時に 其 邑の 婦にして 罪ある者、彼がファリセイの家に 席坐する

し においあぶら も ぎよく うつわ たづさ きた そのうしろ あし もと た な なみだ
を知りて、香膏を盛れる 玉の 盒を 携え来り、其 後に 足の下に 立ち、哭きて、 涙

もつ そのあし うるお おのれ こうべ け もつ これ のご そのあし せつぶん これ においあぶら
を以て 其 足を 濡し、己の 首の 髪を以て之を 拭い、其 足に 接吻して、之に 香膏

ぬ かれ まね これ み おのれ うち い こ ひと も よげんしゃ
を 抹れり。彼を 招きたる ファリセイは 此を見て、己の中に 謂えり、此の人若し 預言者たら

かれ さわ もの だれ いか おんな し けだしこ ぎいぢよ かれ
ば、彼に 捫る者の 孰たり、如何なる 婦たるかを 知らん、蓋 是れ 罪女なり。イイスス 彼に

こた い われなんぢ い こと きれいわ し これ い い
答えて 曰えり、シモンよ、我 爾に 言うべき事あり。彼 曰く、師よ、之を 言え。イイスス 曰え

あるかしぬし ふたり ふさいしゃ ひとり ぎんごひやくまい ひとり ごじゅうまい お そのつくの
り、或 債 主に二人の負債 者ありて、一人は銀五 百 枚、一人は五 十 枚を負えり、其 償
あた よ かれ ふたり ゆる しか ふたり うちかれ あい いづれ おお
う能わざるに因りて、彼は二人に免せり、然らば二人の中 彼を愛すること 孰 か多からん、
こころみ い こた い おも おお ゆる もの かれ これ い なんぢ
試 に言え。シモン對えて曰えり、意うに、多く免されし者ならん。彼は之に謂えり、爾
はか ただ ここ おい おんな かねり い なんぢこ おんな み われ
が議りしこと正し。是に於て 婦を顧みて、シモンに謂えり、爾 此の 婦を見るか、我
なんぢ いえ い なんぢ わ あし ため みづ あた しか かれ なみだ もつ わ あし
爾 の家に入りしに、爾 は我が足の爲に水を給えざりき、然るに彼は 涙を以て我が足
うるお こうべ け もつ これ のご なんぢ われ せつぶん しか かれ わ ここ
を濡し、首の髪を以て之を拭えり。爾 は我に接吻せざりき、然るに彼は、我が此に
い とき わ あし せつぶん や なんぢ わ こうべ あぶら ぬ しか かれ
入りし時より、我が足に接吻して已めず。爾 は我が 首に油を抹らざりき、然るに彼は
においあぶら わ あし ぬ こ ゆえ われなんぢ つ かれ おお つみ ゆる けだしかれおお
香膏を我が足に抹れり。是の故に我 爾に語ぐ、彼の多くの罪は赦さる、蓋 彼多
あい しか すくな ゆる もの すくな あい すなわちおんな い なんぢ
く愛せり、然れども 少く赦さるる者は、少く愛するなり。乃 婦に謂えり、爾の
つみ ゆる かれ とも せきざ ものおのれ うち い こ なんびと つみ ゆる かれ
罪は赦さる。彼と共に席坐せる者 己の中に言えり、此れ何人にして罪をも赦すか。彼
おんな い なんぢ しん なんぢ すく あんぜん ゆ
婦に謂えり、爾の信は 爾を救えり、安然として往け。

(比較用 口語訳) あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いておられることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりには五百デナリ、もうひとりには五十デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい」。それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいつてきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいった時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった。あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。そして女に、「あなたの罪はゆるされた」と言われた。すると同席の者たちが心の中で言いはじめた、「罪をゆるすことさ

えするこの人は、いったい、何者だろう」。しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

※代式祈祷③ へ